

# 博物館だより

No.10

平成19年2月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

企画展

## 刃 Yaiba

くぎるカタチ、けずるカタチ、さすカタチ

2月20日(火)～3月25日(日)

来る2月20日から企画展「刃くぎるカタチ、けずるカタチ、さすカタチ」展を開催致します。

世界で一番優秀な刃物と称される日本刀をはじめとして、日本人は古来より様々な優れた刃物を製作してきました。刃物は人類最古の道具の一つとして、また生活に不可欠な道具として常に人々の生活の中にありました。

日本における刃物の登場は約3万年前に作られたナイフ形石器までさかのぼることができ、以後様々な形の刃物が石で作られます。弥生時代に入り、刃物の素材が

石から鉄へと変化しますが、その基本的な用途である「くぎる、けずる、さす」カタチは現代まで変わらず受け継がれてい

ます。今回の企画展は刃物の形と素材がどのような変遷をたどり、どのような目的で使われたのかを紹介いたします。

主な展示物はナイフ形石器、細石刃、石匙、鉄製刀子、鉄製大刀のほか、当館寄贈資料の日本刀から現代の刃物にいたるまで、約300点の「刃」を展示いたします。

ぜひ、来館下さい。

■開催期間

2月20日(火)～3月25日(日)

■開催場所

当館展示室

■観覧料

常設展示の観覧料でご覧いただけます。

常設展示テーマ展

『豊津高等学校』

校史史料展 開催中

平成19年度から、県立豊津高

等学校が「育徳館高校」に校名変更することを記念して、「豊津高等学校 校史史料展」を現在開催しています。ぜひ、ご観覧下さい。

●開催期間・場所

平成19年4月22日(日)まで

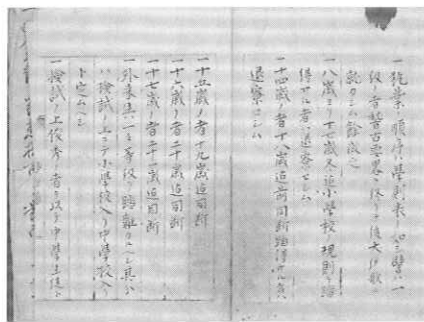
当館展示室にて

●観覧料

常設展示の観覧料でご覧いただけます。

●展示品

小笠原文庫(当館寄託)に含まれる校史関係史料から、主に明治期の史料。



▲育徳館学則(明治4年5月制定)

臨時休館のお知らせ

館内整理及び燻蒸作業のため、2月12日(月)～2月16日(金)の間、博物館は臨時休館致します。

臨時休館中、博物館及び文化財業務に関するお問い合わせは教育委員会生涯学習課

電話 32・5535

、お願い致します。

《古文書解読コーナー》

① 城に参上する

② 人をうやまう

③ 子ども

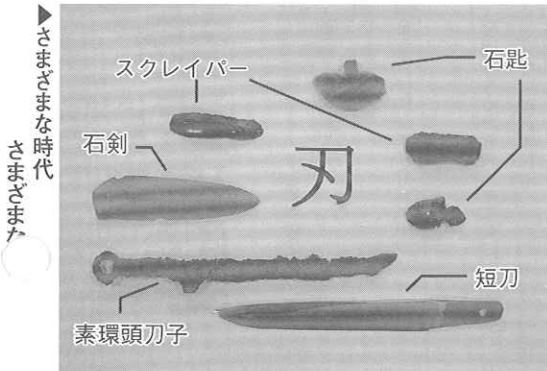
④ 受け答え

⑤ 急用の手紙

◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 登城
- ② 飛尊
- ③ 年幼
- ④ 応対
- ⑤ 急用



▶ さまざまな時代  
さまざまな刃

みやこの「お宝(文化財)」拜見⑩

町指定文化財

# 蔵持山修験道遺跡

【所在地】みやこ町犀川上高屋1-7-7番地ほか

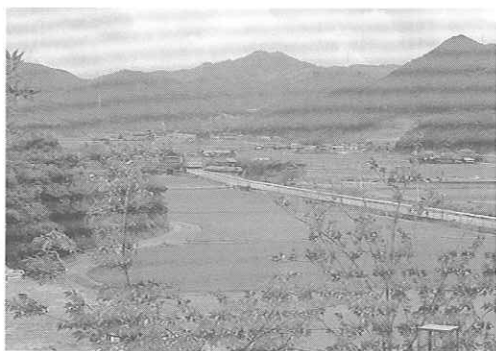
【所有者】宗教法人 蔵持山神社

【規模・構造】遺跡の範囲は約4km

うち史跡指定地は約30000㎡

## 霊峰・蔵持山

犀川盆地から南を眺めるとき、必ず目にするようになる姿形の良山があります。その山は富士山型をして頂上がやくほみ、東西に同じような姿の小山(東・神楽山・西・帝釈山)を随えています。さながら親子あるいは三尊仏のようで、見る者を穏やかな心地にくれくれますが、背後には険しい英彦山の山並みを控え、手前には高屋川とそこに開けた肥沃な犀川盆地



▲北側から望む蔵持山(中央)。右は帝釈山

を抱えるなど、まさに「サト」と

「ヤマ」の境に立つ「ハヤマ(端山)」の風情がよく表れています。

この山こそが蔵持山(標高478m)でその美しい姿に古来人々は神の存在を感じとり、祈りの山として崇め、その歴史は優に千年を超えています。

## 蔵持山の由緒と歴史

祈りの山としての歴史は原始の頃まで遡ることもできるかもしれませんが、はっきりとした資料で確認できるのは平安時代からです。その資料とは鎌倉時代に書かれた「彦山流記」という書物で、蔵持山が霊山として開かれることとなったユニークなエピソードを記しているの以下にご紹介しましょう。

「その昔飛ぶ鳥を気合もるとも地面に落とす験力(超能力)使いの静暹という上人がいた。上人はある時彦山権現のお告げで鞍用山(蔵持山の古表記)の窟に籠る事となり、修行中の食料を賄うため托鉢用の鉢を持参して山籠りした。



▲静暹上人も籠った? 山中の窟(中宮窟)

鉢は修行の合間に麓の村へゆき飯米を乞うたもののだが、そこは験力の上人。自ら歩き回ること

はせず験力で鉢を飛ばして毎日飯米を乞うてまわった。ところが、

ある日鉢は遠出して門司関までゆき、港に停泊していた貢進船(年貢米を京へ運ぶ船)に行き、船頭に飯米を乞うたが「お上に納める米だから」とにべもなく断られた。これに腹を立てた鉢は悪態をついて

ぶいと飛び去ったはいいが、同時に船に積んであった米俵が次から次々に鉢を追いかけ皆飛んでいってしまった。あわてた船頭は泡を

食って追いかけて、ようやく鞍用山で追い付いた。よく見ると件の鉢が上人から「米を返してこい!」とお叱りをうけている。その様子を見た船頭は「かような験力と誠意をお持ちの上人ならきっと素晴らしい人助けをされるに違いない。米は全て寄進しますから寺を建てて人々をお救い下さい」と上人に

つげ、自らも上人に弟子入りした。

後この米を納めるための蔵を建てたことから山の名を蔵持と改め、寺を建てて宝船寺と呼んだ。時に承平(天慶(10世紀)の頃のことである)というものです。一見この話は荒唐無稽のようですが、平安中期以降空海・最澄による密教請来を期に山林修行が盛んになったこと、その支援には律令政府や国府といった公的機関が当たったことなど、ちゃんと時代背景が織り込まれており蔵持開山をめぐる一定の事実が語られていると考えられています。

## 山中に残る様々な力タチ

こうして修験の道場として開かれた蔵持山には、多くの修験者が集まり、最盛期には96の僧房(住居)が立ち並んだといわれています。その数は江戸時代になると18に減りはしたものの、法灯は絶えることなく明治維新まで続きました。

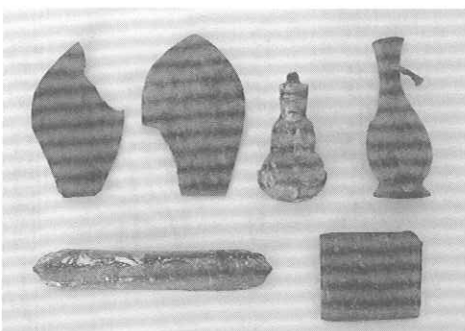
この間、山に籠った修験者たちは山内の窟で窟籠りをして瞑想にふける一方、山内に点在する窟や磐座を巡って抖擻(駆け込み)修行を行い、回峰道や峰入道などの修行のための道を拓いたり、神々を祀る祭壇やさまざまな供養施設(経塚・供養塔・墳墓等)を築きました。

こうした営みが幕末まで千年近く続けられた結果、山中にはあちこちに祈りのための施設や場が残されることとなりました。まさに全山が祈りの場であり、「木一草一石に神が宿る」「悉皆に仏性有り」といった修験の心が具体的にはこうした場をさすということがわか



▲発掘が進む磐座遺構(左手の巨石)

ります。これらの施設は幸いに殆ど開発の対象とされることなく、自然崩壊を除いてはほぼそのままの姿で保たれてきましたが、近年に至り林道開発などがはじまり、これに伴う発掘調査が行われるようになりました。特に平成16年から始まった発掘調査は調査面積は僅かながら、出土遺構・遺物には目を見張るものも多く、長年の営みが山を「宝の山」にしていたことを物語っています。



▲17年度の発掘調査で出土した金堂製仏具類